

## 2012(平成24年)開講の「エッセイの書き方」

講師：永杉徹夫氏

受講生数：48人

趣旨：歳とともに深めたい人間性—“おもいやり”や“やさしさ”。エッセイの書き方を学ぶとともに、老いを見すえた、私たちの生き方を考えます。入門し易く、かつ奥深いエッセイの魅力に触れ、書くことの喜びをあげています。

シラバス：

1	自分史とエッセイ — その違いと共通点は何か。エッセイだけがもつ魅力、威力について、実際に作品を読みながら考える
2	何をどう書けばよいか — テーマを見つける方法。日常生活の中でのエッセイ執筆という行為を、具体的に考え位置づけてみる
3	共感を呼ぶ文章とは — 自分で書いて納得のいく文章、読者の共感を呼ぶエッセイとは、どんな内容、表現をもっているのだろうか
4	書くことで得られるもの — 生きること、老いゆくことの中身を、書くことによってより深めていくためには、どうすればよいか
5	作品のブラッシュアップ — 受講生の代表作（講座期間中の提出作品から抽出）を鑑賞、併せて添削・講評例をもとに、自作の推敲のしかたを学ぶ

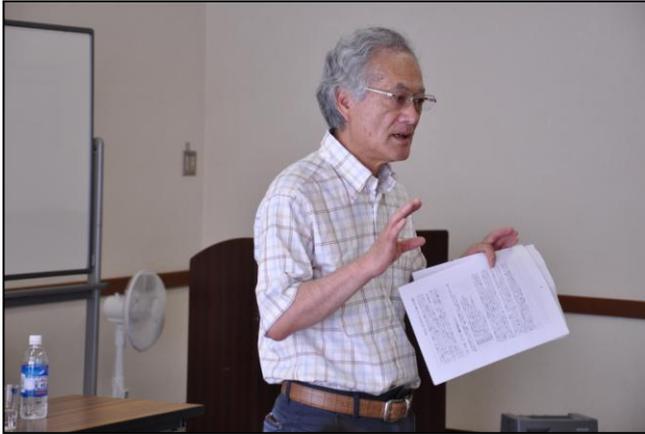
## ふくれた腹がへこみ、たった腹がよこになる「エッセイ講座」

(講座報告：「市民大学だより」10号より転載)

過去34年間の文学講座の内容のおおくは作家作品解説・古典講読といったものです。本年は趣向をかえ、文章表現「エッセイ講座」(6月10日から7月8日まで毎日曜日5回)を開講しました。

文章の実習講座が初めての試みです。日曜日というのも、教室がみずほ台コミュニティセンターであることも募集にどう影響するかは分かりません。参加者数

が気がかりでしたが、開講日までには48名に達しました。ちなみに年齢分布を見ますと、80代4名、70代22名、60代24名、50代2名、40代以下ゼロというものです。毎回42～45名が参加し、先生を囲む懇親会にも約半数(21名)が参加していることから、学習意欲は他の講座よりもきわめて高いといえます。



講師の永杉徹夫さんは、もと毎日新聞社の記者。現在、エッセイストとして活躍するかたわら、「さいたま市民文芸」運営委員（小説・随筆・評論部門）をつとめると同時に、さいたま文学館で、高齢者を対象とするエッセイ教室の指導にもあたっています。

著書につぎのものが 있습니다。

『カラオケ文章術』(1991年・健友館) / 『心に童謡を一評論とエッセイ』(2002年・さきたま出版会) / 『童心は老いず一詩人の風貌』(2012年・林道舎)

第1回の講義で永杉先生は、「エッセイを書くことによって得られる効能(効き目)」として、次の十項目を掲げています。

- ① ものを良く見、聴くようになる
- ② 自分をかざらなくなる、裸になれ先生
- ③ 他人(プロ、アマを問わず)の文を読む楽しさが倍加する
- ④ 人間がより優しく、厳しくなる
- ⑤ 話すことが上手になる
- ⑥ ふくれた腹がへこみ、たった腹が横になる
- ⑦ 日々が平和になり、あせらなくなる
- ⑧ 人間がより濃くなり、長生きしたく

なる

- ⑨ 老年がマイナスに思えなくなる
- ⑩ 童心にかえり、真の自分を発見することができる

第1回の講義がおわると、受講生は、さっそく〈宿題〉をいただきました。お題は、なんと、「りんご(林檎)」。

原稿用紙2枚(800字)、期間は1週間、第2回の講義日に提出するというもの。取り組んでみて気づいたことですが、「りんご」はじつに話題の豊富な果物です。原罪はりんごを食べたことから始まりますし、物理的世紀の大発見もりんご、初恋はりんごの木のもとで行われ、みかんや、柿の木のもとではありません。主題はあれこれ迷うくらい思いつきます。

提出者は36名。さらに1週間後には入朱添削がなされて返えされました。

「ここいいところ、もっと描写をていねいに」といった指摘もあれば、「世間並の判断に走らないで、自分の言葉でしっかり書きこみなさい」といった叱責もある。簡にして要をえた添削講評です。先生はこの添削を、喫茶店、電車の中でなさるそうで、朱文字の多少乱暴に見えるのが、車中でおこなった添削とのこと。

添削講評はさることながら、私たちが驚いたのは、36名の作品の多様さです。“36個のりんご”が、それぞれ異なった表情をしていることでした。書き手が違うのだから当たり前のことかもしれませんが、それぞれの作品が、800字の文章から、60年、70年、80年間をいきてきた、受講生一人ひとりの人生の断片を垣間見ることができます。市民大学は、36名の作品を

『りんごづくし』として一冊にまとめ、記念文集を発行しました。

エッセイ講座では“絵本”もたくさん取り上げました。つぎのもので—

『おじいちゃんがお化けになったわけ』

(キム・フォップス・オーカソン)

『でも、忘れないよベンジャミン』

(エルフィ・ネイセン作)

『ずーっとずっと大好きだよ』

(ハンス・ウイルヘルム作・絵)

すべて「死」がテーマです。おじいちゃんの死、生まれてすぐ逝った弟の死、自分といっしょに成長してきたペット(犬)の死…。悲しい死が、主人公の心のなかで、いつしか、ともに過ごしたことへの感謝の気もちへと変わります。

いずれも、お薦めの名作です。

## 受講感想文

50 音順配列

少しはエッセイなるものが解ってきたよ  
うな気がするから不思議だ A.

I.

「エッセイ」それは私にとって以前から、とても心地よい響きの言葉であった。一度は書いてみたいと思っていたが、なかなか書く機会もなく今日まで来てしまった。

今回永杉先生から5回の講義を受け、その全てが目からウロコの状態であった。サラリーマン時代に「会議資料」は数多く作成したが、エッセイなるものにはトンと無縁であった。しいて言えば社内報の「編集後記」を書いたくらいである。

従って、まず「エッセイとは何ぞや」に始まり、「一体誰のために書くのか」「何を題材にすれば良いのか」と思っているうちに思っているうちに、初回講座の最後にいきなり「りんご」をモチーフに800字に書いて来週提出を、には正直言って参った。

「自慢話は書くな」「失敗談こそいいエッセイ」との先生の言葉を信じて書きだした。案の定添削には「もう少し分かりやすくまとめるように」とあり、読み返してみると真にそうであった。

救いは「良い話ですね」とあり、先生から手を差し伸べて戴きホッとした。

しかし、4回目修了後には、何となくではあるが、少しはエッセイなるものが解ってきたような気がするから不思議だ。

そこで、もう一度自分なりに書きかけてみると、少しは纏まったエッセイになったかも、自画自賛している。先生の講義の中で、まずは「いいエッセイを数多く読むこと」そして「自由気ままにありのままをどんどん書いてみる」という言葉に納得した。

エッセイにもいろんな種類のあることを知り、これからは「自分史」を書くつもりで、時間を見つけ何編か書き続けていきたいと思っている。誰かに読んでもらう訳でもないが、誰か一人くらいは読んでもらえることを信じて…。

最後に市民大学の講座によくぞ「エッセイの書き方」を取り入れてくれたと思う。スタッフの皆さんに厚くお礼を申し上げます。

永杉先生、本当にありがとうございました。お陰さまで心が少しだけ豊かになりました。



## やっとエッセイを書くスタートラインに 立てたのかなあ T. F.

昨秋、文学講座受講の折、2012年度文学講座に関するアンケートが実施され、その項目に、「ふじみエッセイストクラブ(仮称)」が誕生したら参加してみたいと思いますか?との問いが。迷うこと無く「参加してみたい」に○印を付す。

以来、アンケートの結果が反映され「ふじみエッセイストクラブ(仮称)」が開設されることを切に期待をし、その機を待ち望んで居りました。

そして、待ちに待った講座「文章表現・エッセイの書き方」が、本年度の文学講座前期にて開講。望みが叶った嬉しさと共に、当講座開設に向けて奔走下さいましたご担当役員の皆様方のご尽力に感謝を申し上げます。

今回の受講のきっかけは、長く携わっていた仕事で書いた文章と言えば、組織内の通達文、出張所感、他、味も素っ気も無い事務的な内容で、柔らかな色合いを醸し出す雰囲気にはほど遠い固い文章ばかりでした。退職後、ふっと、女性らしい情緒が漂う文章が書けるといいなあ、と考えるように。折しも、市民大学の新設講座「文章表現・エッセイの書き方」を、何ら迷い無く受講に到りました。

四季折々の美しい花々に出合った時の直感と感動の体験を文章で表現して見たいとの日頃の思いと、当講座「文章表現・エッセイの書き方」とが幸いにも重なり望みが叶った次第です。が、第1回目(6/10)の受講日が近づくとつれ、文章を書いて見たい思いとは裏腹に、書けるのかしらとの不安が胸をよぎり始めました。

しかし、永杉先生のご講義で、「他人の目や評価は気にしない」「下手に書きなさい」「事実に基づいて書く・ありのままの姿を、何の着色もせず飾りを避けて」「序(序論)・本(本論)・結(結論)」等をはじめとする基本をご指導頂きました。

そしてとにかく書くこと、それ以外に進歩なしと言う内容のお話しに励まされて、四苦八苦の末に宿題の題目「りんご」を書き終えた時には、ホッと安堵感が。その時、やっとエッセイを書くスタートラインに立てたのかなあ、と自問。

永杉先生のお教え(文章を書く基本)を反復しつつ徐々に歩を進め、焦らず無理せず、書き度い時にありのままの姿を飾らず書き表そうと思います。

永杉先生の静かな語り口で解かり易いご講義に耳を傾け、多くのことを学び、そして楽しく拝聴させて頂きました。

また、絵本には縁が薄かった私ですが、永杉先生の朗読『でも忘れないよベンジャミン』に聞き入りました。先生の朗読と解説から、主人公の少年が家族の愛情に恵まれるなか、亡くなって星になった弟と新たに誕生した妹を思う純真な気持が、清々しく一冊の絵本の中に凝縮されている内容に惹かれました。

これを機に、姪の子供(5歳)に読み聞かせたいとの思いが。それは、当講座を受講させて頂いた賜物と感謝いたして居ります。

充実した5回の講座、アットという間に終了してしまいました。が、この先、当講座の続きあることを切に願って居ります。

文学散歩には、さいたま文学館と中山道桶川宿を訪ねました。

本年の文学散歩は、桶川市の“さいたま文学館”と“中山道桶川宿”を訪ねました。

さいたま文学館は、県民の文学活動の拠点施設として、埼玉県によって設置されました。開館は平成9年のことです。埼玉県ゆかりの文学者の作品や、文学関係の貴重な資料が収集・展示されています。当日は、文学館の学芸員（西口さん）にご案内いただきました。

桶川市はベニバナと小麦の集散地として栄えてきた街です。また、中山道の宿場町としても知られています。おりしも7月15日は、桶川市の夏祭り（「桶川祇園祭」）です。神楽、山車、人形でにぎわい、300年ちかい伝統をもっています。「なかなか盛大で、一見の価値がありますよ」と永杉先生の推奨もあったものですから、山車がねり歩くまでの間を、宿場町の旧跡見学に時間をつぶしました。案内人は森田さん（「桶川市ガイドボランティアの会」副会長）。年季の入った女性ガイドでした。

記

参加費 無料（ただし交通費と昼食代は各自で支払います／入館料は65歳以上無料）

交通費 1340円（鶴瀬～桶川間の往復）／ 昼食 750円～1500円程度

日時 平成24年7月15日（日） 雨天決行

集合 9：00（東上線川越駅／改札を出たすぐの広場）

旅程

往路 埼京線	9：10～9：33	川越～大宮
高崎線	9：43～9：57	大宮～桶川
さいたま文学館	10：15～12：00	ビデオ・見学・解説
昼食	12：20～13：30	うどん・そば・丼「いしづか」
宿場の旧跡見学と観光	13：40～15：40	「宿場館」からスタート
帰路 湘南新宿ライン	16：18～16：29	桶川～大宮
埼京線	16：37～16：59	大宮～川越（駅のロビーで解散）

（左はさいたま文学館・上は桶川祇園祭）

